

ムツゴロウの

Part 2

娘

畑 正憲



ムツゴロウの娘 Part 2

畑 正憲



読売新聞社

ムツゴロウの娘 むつごろうのむすめ
よ Part 2
P a r t 2

昭和五十七年十二月五日 第一刷
昭和五十八年一月十九日 第三刷

著 者 畑 はた 正憲 まさのり

編集人 守屋健郎

発行人 加藤祥二

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一七七一 一七二〇〇
大阪市北区野崎町八一〇 一七五三〇
北九州市小倉北区明和町一一一 一七八〇二

印刷 三陽社 製本 協和製本

定価 九五〇円

0095-703410-8715

落丁本、乱丁本はお取り換えいたします

目次

中年雀狂の真剣なる告白	7
人間は動物と話が出来る	13
片脚の雀がくれた出発信号	19
二日だけのバリ食べ歩き	26
すこしは役に立ちたいよ	32
貧乏閑なしの一生	38
バレーの度に思い出す	44
おれを生かした絵の記憶	50
ムツゴロウのスキー事情	56
心すべきこと	62
C F 作家の頃	74
クビになるまで	80

帰ってこいよ 87

フリーになったら忙しかった 93

一世一代の名タンカ 99

町で拾った幸運 106

動物王国の夢 112

判らなければ仕方がない 118

おれの大学 124

大学はつまらないかな 130

料理と大学 136

自分だけの大学を見つけなよ 142

歌を書くのは難しい 148

生きていくテクニク 154

おいしい、元気でな 166

キツネが見せたよ 172

人よサギを殺すな 178

心やさしい哲学者たち 184

あとがき…………… 191

《装丁・本文カット》はたあすみ

ム
ツ
ゴ
ロ
ウ
の
娘

よ

P
a
r
t
2

中年雀狂の真剣なる告白

先日、おれは麻雀に狂った。と言ってもおれの麻雀狂はかなり知られているので、今更という感じはあるのだが、アラスカから帰ったばかりで、次にはイギリス旅行が控えている忙しい最中に、それこそ寸暇を惜しんで牌パイを握った。

本当にいいのとお前は心配した。それからいくらか口ごもるように、
「お互いの生活に干渉したくないし、いいんだけど、何だか心配よ」

そう言ってお茶をいれてくれた。

エンピツを握る指が痛くなって、持てなくなるまで仕事をし、それから次の仕事にとりかかるまでの時間を、雀荘に駆けつけて過してしまふのだ。帰ってきて机に向うのだから、不眠不休の毎日だった。

どうしてそのようなに狂ったかと言うとだね、麻雀が見えなくなっていたからなんだ。そう説

明するとお前は答えた。

「何だか分る気がする。帰ってきた時、表情が冴えないもの」

「負けやしないんだよ」

「そうでしょうね」

「叩き伏せられたら、まだ納得出来る。でもさ、しのぎにしのいで、それで僅かなマイナスでぶら下っているんだよ。負けないのが怪しからん」

「しかし本心は勝ちたいんでしょ」

「いいんだ、勝ち負けは。違うんだよ、分らないんだよ」

この間、長門裕之さんなどから誘いの電話がかかってきた。しかし、いずれも仕事の途中であり、行けば長くなるし、メンバーがきっちり組み上がると中途で退場というわけにもいかず、追われている身としては遠慮するしかなかったんだ。その点、雀荘だったら、こちらの都合でだけ打てる。

しかしメンバーの技術のほどは玉石混交、マナーの方もあまりよくないものがあったりする。ビギナーに近いものでも、四人の中に入って中和され、そこそこに打てるんだよ。

技術については、おれはプライドを持っていた。さあこいと卓に坐る。

すると、間もなく、荒っぽい闘いを挑む男がしゃしゃり出てきて、肝心カナメの牌を切出し

てきて、場が荒れ、その対応策に腐心しているうちに、カナメの牌を利用出来た人がツキを拾って走っちゃうんだね。そうなるとなかなか勢いが削げなくなってくる。

おれは、心の中でブツブツ言う。

「どうもね。変なメンバーだな。乱暴をする人間がいると、面白くないな」

口に出して言いはしないんだが、それだけに湿った怒りが気持ちを重くするんだ。

貴重な時間を割いて打ってんだ、もっと、メリハリのあるゲームをしようとも思う。そんな不満が体の中を駆けめぐって、次第に手牌も落ちこんでくるんだよ。

びっくりしたね。し

かも、相手の手の内が読めなくなっているんだ。セオリはさすがに身についていて、何とかツボを外さぬように打てはするんだが、ここぞという時に、ピンと勘がひらめかな



いんだよ。

お前も知っているように、去年の暮れ、麻雀界には八百長事件というのがあって、被害者にされてしまったので、おれは嫌気がさしてやめてしまった。もう打たないよと宣言したさ。

よくやるんだ、おれは。

ま、それから、いろんな人に説得された。やめれば済むというものじゃない、今まで麻雀について発言していた責任をどうとってくれるんだという若い人からのお叱りもあった。話し合っているうちに、おれが誤解している部分があったことも分ってきた。おれが怒っている点について、しかるべき回答と詫びが入った。

それで、小一年の休雀にピリオドを打つことになってしまったんだ。『雀豪日本一決定戦』にも出る事になった。

ギャラを貰って出る以上、恥しい麻雀は打てないんだよ。なあんだ、あんなものかと笑われるのは死ぬほど辛い。作家の麻雀なんてマスコミでちやほやされるだけで、ちっとも強くないとは言わせたくない。

そこでトレーニングに入ったというわけなんだよ。

ところが、たった一年弱の間に、まるで霧の中にいるみたいに、何も分らなくなっているのはたまげたよ。あつという間に、C級かD級に落ちていた。

焦ったなあ。口惜しかったね。

負けるものか、こん畜生とファイトがわいてきた。卓についている間、人殺しでもするかのように真剣になった。

でもダメなんだ。鳴かず飛ばずなんだ。勝つことは、それはあるんだけど、今一つスッキリしないんだ。おれは、巷の麻雀打ちの中にもぐりこんで、これでもか、これでもかと修業する気分だった。

あまりにもスッキリしないので、かつて自分が書いた技術書を読んだりした。それでもダメであり、打ち盛りの頃の、全身の細胞が一つの牌に反応するような敏感さが戻ってこなかったんだね。

おれは、十年ぶりで、麻雀について悩んだんだ。

そして、ふと気がついた。麻雀をやめると言った時、何かが終ったんではないかと。大切なものが死んだのではないかと。

それは何だろう？

そこで目が開いたね。おれ、麻雀というゲームが好きだったんだ。愛していたと言ってもいいんだね。それをだ、やめるといふのは捨てることだよな。ポイ、なんだ。ポイすると決めた瞬間、愛情の糸が切れたのではなかったのか。

卓を囲んでいる人たちへの、小さな怒りにしてもそうだ。全盛期には、稚い打手の乱暴を、おやおやと愉しみ、それではおれが勝っちゃうよと困っていた。怒りが、不満が、心の中でぶつぶつと煮えるなんて、第一、おれが嫌いな生き方ではなかったのか。

これだ、と思ったね。おれはさっそく、牌譜を取出して読んだ。

面白いんだよ。なるほど、こう打つところになると、運の理屈が見えてきた。

おれは小躍りをして、雀荘に駆けつけたのさ。そこで、何と、十四連勝という離れ業をやったのけた。すっかり復調していた。相手の手牌の急所が、きっちり透けて見えるようになっていた。

うへえ、とおれは笑ったさ。

とことん好きにならねば、その熱い気持ちを持ち続けねば、麻雀というゲームにだって納得いく形で加われないんだなど不思議だったよ。雀豪決定戦の方は、九州まで行き、マイナス一度もなし、四戦のうちトップ三回というぶっち切りで勝ち上がった。

たかが麻雀なんだけど、生きてくことと妙に同じでさ、やめられないんだよね。

人間は動物と話が出来る

イギリスで聞いたんだけどね、動物と話が出来るおばさんがいて、たとえば暴れ馬がいるとそばに行き、静かに語りかけているうちに馬は静かになるんだってさ。そのおばさんはテレビに登場し、今ではちゃんとした紹介者がいないと会って貰えない人気者になっちゃってるとさ。学者に多いんだけどね、動物となんか話は通じないと思ってるものもあるよ。

おれ、へへ、と笑いたくなるよ。

犬とたって、猫とだって、おれたち普通に会話をかわしているものね。それは人間の方から一方的な思いこみなんだと言われたりすると、実際を知らない人というのは気が楽でいいなと感心するよ。

動物のことを正確に知るのは、たとえば丸ごとの動物だったら、動物行動学を学んで、感情で知っている部分を拒否しなければならぬという人もいる。

学問は、それは偉大なものだけでも、学問のきらめきに負けて、それでだけ世界を理解しようとするのはこっけいなんだ。

おれはねえ、学者になろうと努力していたことがある。

動物学科に入って、正規の学問を修めた。それでも飽き足らずに、大学院で研究のマネごとをやった。勉強もしたんだ。

クラスメートの中には、動物学をやるために生れてきたような男もいて、小さい時分から動物に親しんでいるので、昆虫の名や鳥の名に、それはそれはくわしいんだ。おれは、哲学でもやろうかと大学にもぐりこんだのだから、そちらの方の知識はまったくなかった。海岸へ行つて、アメフラシと言われても、どんな動物だか知らなかったんだからね。

動物は、好きだったよ。振り返ってみるとわが家には、ずいぶんいろんな動物が持ちこまれていたものね。好きだったけれども、系統だった知識は皆無だった。

今でもその欠点はあって、森へ行き、平凡な鳥の名が分らずに頭をかいたりしているんだ。博物学の知識に穴があるのが、とっても恥しいよ。

それでもさ、何とか努力して、皆について行つたさ。こっそり、いろんな本を読み、動物を語るぐらいのところまでは行きたいと思った。

学問の方は——正直に言つて続けたかった。二十年経った今、冷静に振り返ってみてもだよ、